

奈良産業大学『産業と経済』第17巻第5号（2002年12月）67-79

## 常用語義の変遷<sup>1)</sup>

植 田 均

[提要]中国の歴史は長いが、大きく文言(古代中国語)と白話(近世、現代中国語)に分かれる。現代中国語の直接の祖先は近世中国語であり、これを解明することは、現代中国語を理解する上においても重要である。

### 1.近世中国語の成立

#### 1.1.文言と白話

#### 1.2. 三つの区分

#### 1.3 近世中国語(“近代汉语”)の成立

### 2.なぜ、宋代からなのか

#### 2.1.瓦子

#### 2.2.講釈師(口釈師)の腕の見せ所

### 3.元、明の時代

#### 3.1.元曲

#### 3.2.明代資料

### 4.近世中国語は直接の祖先——宋代が分岐点

### 5.語義の変遷

#### 5.1.縦系と横系

#### 5.2.現代語における“面”と“臉”

#### 5.3. “顔” “颜色”

#### 5.4. “目” “眼”

#### 5.5. “齿” “牙”

#### 5.6. “娘”

### 1.近世中国語の成立

#### 1.1.文言と白話

中国語は歴史が非常に長い。例えば、日本がまだ国家の体を成すか否かの西暦5C~6Cは、中国では既に古代ではなく、中世である(アメリカ合衆国はわずか200年の歴史)。したがって、「中国語史」と一口にいても長すぎる上に、特徴のある断層があるはずで、どこかで区切る必要があ

る。「中国 3000 年の歴史」と称するが、これを語史にも当てて、2 大分別すれば、古代語と現代語、即ち、文言と白話になる。

文言とは古代語であり、漢文である。白話とは、広義で現代中国人が使用している話し言葉を指す。

古代語＝文言＝漢文

古代に確立、完成したもので、後、ほとんど発展が無いばかりか、後世の手本とし、その文体をまねる。言語の発展史から見れば、遺産であり、遺骸である。

古代中国語は、我々多くの日本人が昔から素読訓練をしてきた「漢文」である。漢文は、経典と称される典籍が基本となる。「十三経」と呼称される基本文献、即ち、《易経》、《書経》、《詩経》、《周礼》、《儀礼》、《春秋左氏伝》、《春秋穀梁伝》、《春秋公羊伝》、《論語》、《孝経》、《爾雅》、《孟子》の 13 種類の書物。儒家の経典である。

これは、非常に大切な文献で、後々の手本となる。加えて、科挙の試験に出題されることにもなり、長く重要視された。後、この注釈という形の「注」が出て、その「注」を更に解釈した「疏」が生まれた。これらを一つにまとめて「(十三経)注疏」と呼称される。(先秦時代の資料には、前記「十三経」の他、《国語》、《戦国策》、《老子》、《莊子》、《韓非子》、《管子》、《孫子》、《墨子》、《列仙伝》、《楚辞》などが存在する)。

これに対し、白話、即ち、現代語がある。これは、現在もゆるやかに変化途上にあり、言語の発展は少しもとどまらない。したがって、現在、なおも確立・完成はしていず、変化し続けているのである。

古代語と現代語の図式は次の通り。

|                    |
|--------------------|
| 文言＝漢文＝古代語→遺産、遺骸    |
| 白話＝現代語 →現在も絶えず発展変化 |

## 1.2.三つの区分

前章で、中国語を「文言と白話」の観点から「古代語と現代語」に二大分別した。ところが、「発展変化しつつあるか否か」の面からみれば、その二者の中間に第三の要素(下記②中世・近世中国語)が存在し、次のようになる。

### ①古代中国語(文言)

漢文→「十三経」を基本、手本とし、既に完成された文体。ほとんど無発展。

### ②中世・近世中国語(旧白話)

「漢文の定型」が崩れ、当初、文言(漢文)の中に口語的要素が参入する程度で、後、定型の白話文体が成立する。近世白話資料が多く出てきた以降を指す。この時期の「白話」は現代中国語(白話)と区別するため、「旧白話」と称する。

③現代中国語(白話)

五四運動(1919年)―白話文運動以降。→現在も発展変化、進化の途中。

1.3.近世中国語(“近代汉语”)の成立

現代中国語の文法体系が突然にできた訳ではない。古代中国語から、中世・近世を経て現代中国語へと時代は変遷しているのであるから、現代中国語の「原型」が存在するはずである。それが、現代中国語の直接の「祖先」の近世中国語であると考えられる。では、具体的な時期はいつか。

漢文体(文言の文体)の崩壊。これが新しい息吹となる。

漢文体(文言の文体)が崩壊すれば、もはや古代中国語とは言えない。具体的にはどのようなものが存在するのか。次の①～⑤に集約できる。

①漢訳仏典：民衆の言葉(即ち、白話)で講釈師(口釈師)が平易に仏教物語を説く。

②詩文：唐代に発達した詩歌(韻文の定石があるが)中へ作者の口語(即ち、白話)を入り込ませる。

③唐代伝奇、話本：伝奇小説(人生の奇なるものを伝える)は文語文であった。

④狂言の類：狂言の類から出た雑劇(宋代)は後の歌劇(オペラの如きもの)へとなる。これは、元曲となり、現代京劇の原型となる。宋代の雑劇は、セリフが白話文で構成されていた。

⑤インド文化(仏教を中心)の受容：絵説き文を指す。「地獄変相図」などの絵を当時の寺院に掲げ、その絵を白話(話しことば)で解説する。「変相図」の解説に当たる文を「変文」という。これは、白話で書かれていた。例えば、《目連変》、《降魔変》など。更に、仏教物語から離れ、《王昭君》(匈奴に嫁ぐ歴史物語)、《張義潮》(辺境で奮戦する時事物語)なども生まれた。

これらをも含めて「近世中国語」とみなす説が(中国人研究者に多く)存在するが、どこかで区切らねばならないとすれば、この時代(南北朝・隋・唐・五代)はまだ「近世中国語」萌芽の時期にすぎない。(ただし、後で触れる具体的な例を挙げた“面/脸”“目/眼”“齿/牙”などの実詞については、漢代、唐代に大きな変化が現れていることが多い。しかし、虚詞の問題は宋・元代以降に大きな変化がある。また、実詞も細かく見てゆけば、宋代以降に語彙量が一挙に増え、現代語と比較しやすくなっている。)

2.なぜ、宋代からなのか

2.1.瓦子

宋の時代は、都市の発達、盛り場(遊樂街)の盛況ができた。そこには、瓦子[wǎzǐ]が多く設けられた(「瓦子」とは、「人が集まる時には、瓦のようにひしめき、去るときには瓦のくだけ散るようにあっけない」という意味)。「瓦子」とは「(盛り場の)演芸場」を指す。

瓦子が最も多く見られたのは北宋の汴京(开封)、南宋の臨安(杭州)で、そこでは、“说话人”(はなしか=講釈師)による「三国志語り」「五代史語り」「小説語り」などが行われた。

“说话人”(はなしか)の上演する“说话”(語り物)は、次の①～④の4分科を持つ。

(1)小説(烟粉[恋愛もの]、灵怪[亡霊談]、传奇[怪奇談]、短編[歴史や人生の一局面に向けられたもの])。(「小説」とは、《莊子》外物篇：「治国天下の大論」に対し、「小さな説」ということで、現代の「小説」の意味は清末から行われた。この意味の定着は、民国初年の新文学運動以降のこと)。

②讲史(歴史物語)

③说经(仏教物語)

④合生(吟詠漫才の類)

これらの“说话人”(はなしか=講釈師)の喋ったものを筆記し、一般民衆が読むという形式になる。宋代は、このように、一般民衆を対象にした形式が醸成されていた。

## 2.2.講釈師(口釈師)の腕の見せ所——物語の引き延ばし

講釈師(口釈師)の喋ったものを集大成したものが後に小説の形へと整って行く。

物語の引き延ばしが盛んに行われ、宋代の歴史物語などは膨らみ続け、ついに明代の長編小説へと集大成されてゆく。明代の著名な長編小説はすべて宋代に短編の原型があった。その一例を挙げると、以下の通り。

宋代：《大唐三蔵取経詩話》→明代：《西遊記》へ。

宋代：《全相平話三国志》→明代：《三国志通俗演義》へ。

宋代：《宣和遺事》→明代：《水滸伝》へ。

「平話」とは、宋代説話人のうち、講史(歴史を語るもの)の台本である。もと「評話」であったが、元人が筆画を省いて同音の「平話」と称した。評論、批評の「評」と同じ。

「近世中国語」の開始時期として宋代からが、ふさわしいのは、豊富な白話資料の出現によるからである。

## 3.元、明の時代

### 3.1.元代資料

元代(1206～1368)は元曲が全盛となる。元曲は、漢史、唐詩、宋詞と並び称される中国4大文学の一つ(【漢史】：漢文とも称す。漢代は司馬遷《史記》をはじめ、歴史文学が代表。【唐詩】：絶句<四句>五言、七言。律詩<八句>五言、七言。唐代に全盛。【宋詞】：楽曲を伴う歌曲の一種。長短句、詩余、填詞などとも言う。宋に至り全盛を極めた)。

元曲：宋の雑劇を整理し、元曲とした。当初、元代も雑劇というが、後世には元曲という。

構成は、「唱」(うた)と「説」(せりふ)の部分から成り、歌劇の体裁を取る。元曲は、“唱”の部分(韻文)が多い。

元曲の主要登場人物は次の4人。

立役：正末。 立女形：正旦 →歌をうたうのは、この2役に限定する。

敵役：浄。 道化役：丑 →せりふのみを言う。

## 常用語義の変遷

言語資料の価値——「白話語彙の変遷」から見れば、基準は以下の①～④とおり。

①(文言に対して)白話が多く使用されていること。

②元曲の如き“唱”(韻文)が多ければ、利用箇所は“説”(せりふ)の部分に限定される。

③方言白話資料でないこと。方言文学とは、例えば、蘇州語で書かれた清代の《海上花列伝》《九尾亀》など。

④様々な階層の人々が登場されている。即ち、豊富な語彙量、様々な階層の語彙があること。

以上を考えれば、元曲は言語資料としてやや不足の面(特に②の項)が強い。

### 3.2. 明代資料

中国文学史上、有名な明代の主要小説に『中国4大奇書』がある。これは、以下に示す二つの大きな傾向があった。

①集団創作(これを集大成者がまとめるという方法を採用)——《三国志通俗演義》《水滸伝》《西遊記》: 伝承の過程に於いて次第に整えた痕跡が見られる(《三国志通俗演義》は、基本的に文言小説の体裁をとりつつ、やや白話へ傾斜しているにすぎず、一般には白話<口語>の研究資料とはしない)

②個人の純粋な創作 ——《金瓶梅詞話》: 中国小説史の中で、初めて一作者による長編小説の製作が行われる。これが後の清代《醒世姻縁伝》《紅樓夢》へと受け継がれて行くのである。

明代の『4大奇書』といわれている白話小説の中では、言語資料として《水滸伝》《西遊記》《金瓶梅詞話》が利用できる。即ち、《三国志通俗演義》は白話(口語)の基準から言って利用に適さない。

### 4. 近世中国語は現代中国語の直接の祖先——宋代が分岐点

例えば、“面”[miàn]は、釈義「顔」である。これは、古代中国語、近世中国語で盛んに行われていた。ところが、現代中国語では「顔」を“脸”[liǎn]という。

では、“脸”は、古代中国語(及び近世中国語)には無かったのか? 答えは「無かった」。厳密には、“脸”の文字は存在していたが、意味が異なった。

“脸”は後世に起こった文字で、その最初の意義は、「両頬の上部」を指す。

[例]

满面胡沙满面风, 眉销残黛脸销红。(白居易《昭君怨》)

(異国の風砂が顔いっぱいになり、黛で描いた眉や両頬のべにおしろいが消えた)

(白居易<772～846>は中唐の詩人。[胡]: 北方、西方の民族を指す。昔、中原人に対して周囲の少数民族などを「東夷」「西戎」「北狄」「南蛮」と称した。)

“面”を用いていないのは、この時代、“脸”と区別が存在したのである。“脸”は、最初は「頬」を指した。とくに、女性の「べにおしろいを塗るところ」。後、徐々に全体としての「顔」を表す

ようになる。

一体、いつから“臉”が“面”に取って代わるのか。この線引きが非常に難しい。この「線引き」ができる箇所こそが「近世中国語の成立」と捉える1つの方法ではないだろうか。

《説文》(後漢の許慎<~147年頃>著の字書。《説文解字》の略称。字体、字義、字音を包括する)に“臉”が無い。

“臉”：左側の“月”(肉)が字義を表し、右側の“𠂔”が字音を表す。本義は「汁を伴った肉」。

《広雅》(3世紀、三国時代の張揖編)：臉，熟也(熟を入れたもの)。

《玉篇》(梁・陳の間の人である顧野王著。543年刊が有力。忠実に許慎の《説文解字》編集の態度を踏襲しようとした)：臉，羹也(あつもの)。

以上の字書では“臉”はまだ「かお」ではなかったことが分かる。

《集韻》(官定韻書の1つ。1067年刊。1008年撰の《広韻》をもとにして増補改訂したもの)：臉，「兩頰の上部」とする。

## 5. 語義の変遷

### 5.1. 縦糸と横糸

語義の変遷は、約1000年の時代の流れの中で捉える「通時論」と、横糸として、日本の26倍という広域を地理的区分で線引きする共時論の方法を用いる。

今、“面”、“臉”の語義を時代別に並べてみると、次の通りになる。

唐以前：「顔」を表すのに単に“面”しか使えない。“臉”が指し示すのは「頰」ですらなく、意味が「あつもの」で、全く異なる。

唐代：「唐代には“双臉”、“兩臉”が見られるので、まだ、“臉”は<頰>であった」(『中国語の環』31号,p.4)。

唐以後：“臉”を「かお」の意味で使うようになる。

宋代：“面”から“臉”へと交替してゆく。次の例の“斂儿”(=“臉”)は「かお」を示す。  
郭威被刺汚了斂儿，思量白净面皮今被刺得青了，只得索性做个粗汉。<<新编五代史平话>>  
(<<百部小说>>陕西人民出版社。“斂儿”=“臉”)(郭威は入れ墨で顔を汚される)

“臉”は「頰」(ほお)ではなく、全体を指す「顔」になる。

元代：油掠的髮髻儿光，粉涂的臉道儿香。<<连环计>>三[滚绣球]  
(<<元语言词典>>上海教育出版社。“臉道”=“臉”)

清代：若扯了一字谎，明日太太访出来，我自己把这两个臉巴子送来给太太掌嘴。  
<<儒林外史>>26回(<<元明清文学方言俗语辞典>>贵州人民出版社。

“臉巴子”=“面頰”「ほお」)

\* 宋~清代：「かお」は、“面”から“臉”へ徐々に移行。しかし、両者は共存、併存している。

現代：「かお」は、既に共通語では“臉”で表す。例えば、<<汉语词典>>“面”の項は既に生

常用語義の変遷

産性が見られない。

“面”は①面部(「顔面、顔部」)。②顔面(<書><1>「顔面」。<2>体面、メンツ。<3>名誉)を表す。

“面”から“臉”へ移行の完成：

“臉”：より狭い範囲(「ほお」)から拡大した部分(「かお」)を指すことになった。拡大の開始は宋代、そして、「拡大の完成は近代であった。王小莘<<词语源流漫笔>>は、<<紅樓夢>>、<<儒林外史>>より用例を挙げる」(『<<水滸>>語彙と現代語』p.117-118)。

5.2.現代語における“面”と“臉”

現代中国語における“面”と“臉”の方言分布表は次の如くなる。

[ “面” と “臉” の方言分布表 ]

| 方言区      |    | 方言点 | 語彙 |
|----------|----|-----|----|
| 官話<br>方言 | 北方 | 北京  | 臉  |
|          |    | 濟南  | // |
|          |    | 西安  | // |
|          |    | 太原  | // |
|          |    | 武漢  | // |
|          |    | 成都  | // |
|          |    | 合肥  | // |
|          |    | 揚州  | // |
| 吳方言      | 北区 | 蘇州  | 面孔 |
|          | 南区 | 溫州  | 面  |
| 湘方言      |    | 長沙  | 臉  |
|          |    | 雙峰  | 面  |
| 贛方言      |    | 南昌  | 臉  |
| 客家方言     |    | 梅縣  | 面  |
| 粵方言      | 粵中 | 廣州  | // |
|          | 粵南 | 陽江  | // |
| 閩方言      | 閩南 | 廈門  | // |
|          |    | 潮州  | // |
|          | 閩東 | 福州  | // |
|          |    | 建甌  | // |

面孔：<<汉语拼音词汇>>にも<方>符号を伴わないで収録。

雙峰は地理上、長沙より少し左下方に位置する。

### 5.2.1. “面”と“臉”の用法上の差異

“面”：本義は「顔」。現在に到る。

①現代共通語では“面”から“臉”に取って代わられた。

②但し、南方方言の粵語、閩語などは、現在でも“面”を使用し、“臉”を用いない。

③共通語の“面”は遺産語(口頭語の中では死語)であって、四字成語(典故がある)など、古代からの遺産語として使用するのみである。即ち、新たな生産性はない。

四字成語の例：面面相覷(互いに顔を見合わせるばかり), 面如土色(顔に血の気がない), 面目一新(面目一新する), 面善心狠(顔は穏やかだが心はむごい), 面苦辣語(仏頂面と言葉も無愛想), 面有喜色(顔に喜びが現れている)

④“臉”は四字成語が無く、熟語(典故は必ずしもある訳ではなく、単にくだけている表現)が多い。その例:臉上貼金(自画自賛する、体裁をかざる)

典故がないのは、新しい語であると判断せざるを得ない。

### 5.2.2. “面”と“臉”の方言分布

現代でも“面”を日常の常用語として「顔」を表すさいに使用している方言区域は存在するか否か。存在するのならば、どの区域か。

<<汉语方言词汇>>(第二版)(北京大学中国语言文学系语言教研室編)によれば、北方官話は全て“臉”、南方諸方言はほとんど全て“面”である。“面”と“臉”は、揚子江以南と以北で完全に区分される(下の“面”と“臉”の方言分布表参照)。これほど明瞭に区分される語も珍しい。

粵語、閩語などは古代からの語“面”で一貫している。“臉”は、現代に到ってもこの区域に入ってこなかったこともわかる。

### 5.3. “顔”及び“顔色”

“面”と“臉”は「かお」を表したが、一方、日本語の中の漢語に“顔”がある。“顔”の語義はどのような変遷をしてきたのか。

“顔”：右側の“頁”が意味(頭部)を表す。左側の“彦”が音を表す。本義は「ひたい」(脳門子)。

“心热病者顔先赤”(心脏患炎症的脑门子先发红)。<<素问・刺热论>>

“額”(ひたい)と“臉”(かお)は連なっており、明確な区分が無いので、派生義として「かお」「容色」の意味ができた。これも「狭い範囲(ひたい)からの拡大(かお全体)」になった一つのケースである。

顔色憔悴, 形容枯槁。(面容憔悴, 身体枯干)。<<史记・屈原列传>>

“顔”は、日本へはこの時の意義「かお」が伝来した。

現代語中国語では、“顔”一字では一般に用いられず、複合していくつか名残をとどめる。

次の例は、明末清初成書の<<醒世姻縁伝>>からの“顔色”である。意味は「かおの表情、かおのつや」であり、この点は、前記<<史記>>の用法と同一で、現代語中国語では書面語として残存する。



常用語義の変遷

面上失了颜色。(《醒》52回)

なお、現代語中国語の“颜色”は一般に「色(カラー)」と訳義される。

“颜色”の語義変遷表

| 時代       | 春秋          | 戦国 | 漢代 | 唐代 | 宋代 | 元代 | 明代 | 清代 | 現代 |
|----------|-------------|----|----|----|----|----|----|----|----|
|          | .           | .  | .  | .  | .  | .  | .  | .  | .  |
| 颜色①表情、容貌 | —————→…………… |    |    |    |    |    |    |    |    |
| ②色(カラー)  | ……………→      |    |    |    |    |    |    |    |    |

現在、中国で“无颜见亲人”(家族に会わせる顔がない)という。このような古代語の意味用法が残存しているのは、次に示す「成語」としてのみである。その例。

“顾全颜面”(メンツを保つ)、“喜笑颜开”(喜びで顔がほころぶ)

現代では、“顔”を方言で用いる区域がない。では、なぜ日本に存在するのか？日本に伝来した漢語(中国語)は、伝来当時の意味用法及び発音だけでなく、それよりも以前の漢籍(『論語』『孟子』などを含む「十三経」ほか)が多く持ち込まれた。したがって、もはや中国の現代口語・方言にも残存しない「かお」という意味用法が日本語の漢語の中に存在するのである。いわば、古代中国語からの「遺骸」として日本語の中に受け継がれている。

5.4. “目”と“眼”

“目”と“眼”の指す意義は同一なのか、異なるのか。異なるとすればどのように異なるのか。順に見てゆく。

“目”：象形文字。文字が創られたときに出現。したがって、先秦時代は、多く“目”を用いる。後、書面語となり、現代に到る。

“眼”：形声文字。“目”よりも遅れて出現。両漢(西漢[B.C.202 ~ A.D.8]、東漢[22 ~ 222])時代には、既に“眼”が多く使用。後、口語では“眼”の勢力が増大。ただし、“眼”の本義は“眼珠子”(ひとみ)であって(全体としての)「め」ではない。多くの辞書類に引用されている例を挙げる。

《庄子·盗跖》比干剖心，子胥抉眼；忠之祸也。《古汉语常用字字典》(修订本)

《晋书阮籍传》及嵇喜来吊，籍作白眼…籍大悦，乃见青眼。见礼俗之士以白眼对之。《常用词古今义例释》

これらの“眼”は「ひとみ」を指す。

現代語にもこの名残りが見える。“白眼”(侮蔑的なまなざし)、“青眼”(黒い目)など複合語構造を成すものにある。

「め」は、後にできた意味。(「ひとみ」という)「狭い範囲から拡大された」結果、後世、“目”

と同義になる。

「め」の歴史を表にすれば次の如きになる。

「め」の歴史の変遷表

|       |                         |
|-------|-------------------------|
| 時代    | 春秋 戦国 漢代 唐代 宋代 元代 明代 現代 |
|       | ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・         |
| 目 「め」 | —————→                  |
| 眼 ①め  | .....→                  |
| ②ひとみ  | —————→×                 |

では、現代方言ではどうか？現代方言に見る「め」と「ひとみ」の表を次に示す。

現代方言に見る「め」と「ひとみ」

|                              | 方言区(方言点)     | め    | ひとみ        |
|------------------------------|--------------|------|------------|
| “眼”を用いる<br>「め」と「ひとみ」<br>を分ける | 北方方言<br>(北京) | 眼睛   | 眼珠子<br>眼珠儿 |
| 「め」と「ひとみ」<br>を同一表現とする方言      | 呉方言(蘇州)      | 眼乌珠  | 眼乌珠        |
| “眼”字を不使用                     | 閩方言(アモイ)     | 目矐、目 | 目[矐]仁      |

### 5.5. “歯” と “牙”

現代中国語では「歯」を表す“牙”“齿”は同義語である。ただ、一般に“牙”を用い、“齿”は単独ではほとんど用いられない。しかし、日本語の中の漢語では「歯」と「牙」は完全に意味が異なる。なぜか？これは、古代中国語と関係がある。

中国の古い字書《说文》では次の如く示す。

“齿”：<<说文>>：口断[yín]骨也。象口齿之形，止声。（“口”の中の上下に歯が並ぶ形）

“齿”の古い例。

“谚所谓‘辅车相依唇亡齿寒’者，其虞虢之谓也。”<<左传·僖公五年>>

（諺にもいうように「ほおと歯茎は互いにもたれあっていて、唇がなくなれば門歯も寒さを受けてしまう」。これは、虞国と虢国の関係でもあります）

齿：“门牙”（「門歯」）。一般に「歯」の総称。この意味が日本に入ってくる。

一方、“牙”はどうか？《说文》では次の如く示す。

牙：<<说文>>：“牡(mǔ)齿也。象上下相错之形。”（本義は“大牙”<=槽牙>「臼歯」）

したがって、当初は、“牙”は“齿”より大きいことを示す点が理解できる。

常用語義の変遷

“牙”：「大きな歯、うしろの歯」(＝臼歯)

“牙”の例。

耳目聰明歯牙完堅。 《后汉书·华佗传》(《古汉语常用字字典(修订本)》)

以上、“歯”と“牙”の語義の変遷を表にすれば次の如くなる。

“歯”と“牙”の語義の変遷。

|   |              | 春秋          | 戦国 | 漢代 | 唐代 | 宋代 | 元代 | 明代 | 現代 |
|---|--------------|-------------|----|----|----|----|----|----|----|
|   |              | .           | .  | .  | .  | .  | .  | .  | .  |
| 歯 | ①「前の歯」       | —————→×     |    |    |    |    |    |    |    |
|   | ②「歯」         | .....—————→ |    |    |    |    |    |    |    |
| 牙 | ①「大きな歯、後ろの歯」 | —————→×     |    |    |    |    |    |    |    |
|   | ②「歯」         | .....—————→ |    |    |    |    |    |    |    |

現代共通語では“歯”が生硬で、“牙”が一般的、且つ、口語的。

次の如く用いる。

“刷牙”(歯を磨く)：「動詞+目的語」構造

“牙刷”(歯ブラシ)：二音節語の「名詞」

5.6.“娘”は「むすめ(少女)」か「母親」か？

日本の中の漢語では、“娘”は「むすめ」であるが、現代中国語の“娘”は「母親」を指す。ならば、日本語の中の漢語の“娘”の意味はどこからきているのか。日本語に残存している漢語は、(中国の諸方言に残存している語と同様)古代中国語の意味用法から来ていることが多い。

“娘”：

<<辞源>>:女良切,平,阳韵,娘。释为①むすめ、少女。②“母亲”(母親)。

<<太平广记>>(978年の成書),<<乐府诗集·木兰诗>>(通常、六朝梁代の作とされる)より引例する。

<<古汉语常用字字典>>:①むすめ、少女。②“母亲”：敦煌写本(敦煌変文は唐末から宋初にかけての資料)の<<舜子变>>より“后阿娘”。

“娘”の「むすめ・少女」の例。

《王力古汉语字典》：后起字。①妇女的通称,多指青年妇女。

见娘喜容媚,愿得结金兰。《乐府诗集·子夜歌》

(子夜とは、東晋(317-419)時代の女の子の名)。

②母亲。《太平广记》

<<常用字古今例释>>:娘：“女”表意,从“良”声。“良”有可爱意,故为少女的名号。

現代語における<古代語の名残>は“大娘”、“姉娘”、“新娘”、“娘子”の如く“娘”の字で構成す

る。

“孃”は、初め別義であった(《说文》:“孃,烦扰也,一曰肥大也。”)。のち、「母親」の意味となる。その後、“娘”の字が興り、“孃”字は用いられなくなる。では、いつ頃、“娘”、“孃”の両者の差が顕著になっていったのか。宋代であろうと考えられている。《常用字古今例释》によれば、唐代ではまだこの両者は厳格であった(“孃”从“襄”声,“襄”有照料意,故为爷娘正字。唐朝人用二字界限还很严格,爷字绝不作“娘”。唐以后“娘”字通行,“孃”字渐废)とする。

“娘”、“孃”の歴史

|   |        |        |               |
|---|--------|--------|---------------|
|   | 唐代以前   | 唐代     | 宋代            |
| 孃 | 母親     | 母親     | ×             |
| 娘 | むすめ・少女 | むすめ・少女 | ①母親。(②むすめ・少女) |

|     |      |              |    |    |    |    |    |    |    |
|-----|------|--------------|----|----|----|----|----|----|----|
|     |      | 春秋           | 戦国 | 漢代 | 唐代 | 宋代 | 元代 | 明代 | 現代 |
|     |      | .            | .  | .  | .  | .  | .  | .  | .  |
| “娘” | ①むすめ | .....→.....× |    |    |    |    |    |    |    |
|     | ②母親  | .....→.....  |    |    |    |    |    |    |    |
| “孃” | 母親   | .....→...×   |    |    |    |    |    |    |    |

現代方言における“娘”字を含んだ複合語の残存を表にすれば次の如くなる。

「少女」に相当する現代中国語の語彙

| 共通語/方言 | 方言点 | 語彙      |         |
|--------|-----|---------|---------|
| 共通語    |     | 姑娘(むすめ) | 女孩子(少女) |
| 閩語     | 潮州  | 姿*娘团    | 姿*娘团    |
|        | 福州  | 诸*娘团    | 诸*娘团    |
|        | 建瓯  | 阿娘团仔    | 阿娘团仔    |

[注]\*印を付した  
“姿”“诸”は  
当て字。

古代語“娘”(むすめ、少女)の名残は南方の閩語(福建語)にある。しかし、同じ南方でも湘語、贛語、呉語、粵語などの閩語以外の方言区点では“娘”の文字を用いない。例えば、湘語“妹子”(長沙)、贛語“女崽子”(南昌)、呉語南区“媛子”(温州)、粵語“女仔”(広州)である。

“娘”:日本へは釈義「むすめ、少女」が入る。即ち、日本へは唐宋代は勿論、六朝時代よりも前に示した語義が伝えられたのである。そして、「母親」の意味は中国では後に起こったゆえ、日本には伝わらなかった。

一方、「母親」を表すのに“娘”の他、“妈”“妈妈”を用いる。《辞源》には“妈”[mǔ ; mā]

## 常用語義の変遷

：莫补切，上，姥韵，明”で、釈義“母”で、“见<<广雅>>。宋・赵产卫<<云麓漫钞>>三”とする。また、“妈妈”は“母亲”と釈義し、“宋・汪应辰<<文定集>>、《续传灯录》七”に“爹爹妈妈”が見えたとする(これは現代中国語と同一である)。

《辞源》によれば、「母親」としての“妈”“妈妈”は宋代からであることが分かる。

“娘”“妈”は、現代方言で分けずれば北方方言である。これに対して、南方では“阿”を冠した“阿娘”(温州、広州)、“阿妈”(潮州、陽江)などという。

### [注]

1)小稿は2002年11月2日、9日、16日三郷町社会教育課主催「21世紀生涯学習講座」(於：三郷町コミュニティセンター)での講演を骨子としている。

### [資料]

- 『中国文学への招待』,平凡社,1975年。
- 韓邦慶,『海上花列伝』,台北天一出版社,1974年版。
- 漱六山房[清],『九尾龜』,荊楚書社,1989年版。
- 許慎,『説文解字』,中華書局香港分局,1977年版。
- 張揖[魏],『廣雅』,國際文化出版公司,1993年版(『字典彙編』所収)。
- 顧野王[梁],『玉篇及原本零卷』,据宋陈彭年等奉勅重修大广益会玉篇影印。
- 丁度等[宋],『集韻』,中文出版社,1982年版。
- 『中国語の環』編集委員会,『中国語の環』31号。
- 吴士勋、王东明,『宋元明清百部小说语词大词典』,陕西人民教育出版社,1992年。
- 香坂順一,『《水滸》語彙と現代語』,光生館,1995年。
- 西周生,『醒世姻縁伝』,上海古籍出版社,1981年版。
- ,『醒世姻縁伝』,齐鲁书社,1994年版。
- 商务印书馆编辑部,『辞源』(修订本),商务印书馆,1979年版。
- 『古汉语常用字字典』编写组,『古汉语常用字字典』(修订本),商务印书馆,1993年版。
- 王力主編,『王力古漢語字典』,中華書局,2000年。
- 李扬鏡、刘欣然、欧阳景贤、林贤鉴,『常用词古今例释』,湖南教育出版社,1987年。
- 北京大学中国语言文学系语言学教研室,『汉语方言词汇』(第二版),语文出版社,1995年。